

保育者の資質の向上をめざす園内研修の試み

——M保育園での研修を手がかりに——

おがわ けい こ
小 川 圭 子

I 研究の目的

M保育園で「子どもをどのような方法で理解していけばよいか」ということを課題として園内研修に取り組んだ。日々の子どものかわりにおいて生起する様々な問題について、保育者集団として問題を共有し、連携をはかっていった。こうした努力を4年間継続した結果、園内研修の課題を自覚化し、話し合うことで、保育者自身が自分の保育を振り返り、保育者としての自己変容を遂げていった。M保育園の4年間の実践記録を手がかりに、保育者がどのような課程を経て自己成長し、保育者としての資質を向上させていったのかを検証してみたい。

II 研究方法

【対象】 大阪市内のM保育園の保育士13名。

経験年数2～12年

【期間】 平成11年9月～15年9月

【方法】 園内研修は毎月1～2回、時間は保育終了後から3時間程度。4年間で計50回の園内研修を行った。園内研修の内容は、輪読、事例研究、合宿(KJ法の習得)、表現実技(カール・オルフの理論を基にする)、レポート発表であった。50回目の園内研修後にアンケート調査を行った。

筆者による園内研修の記録、保育者自身の実践記録、M保育園の保育者へのアンケート調査から、園内研修の過程、園内研修の方法

とその内容を分析・考察していく。

III 結 果

1-1 園内研修の過程

4年間で50回の園内研修を行った。そのプロセスを第1期から5期に分けることができる。

第1期 本の輪読

平成11年9月～12月20日の間に7回。保育者の先入観や手だて、省察などについて、『保育の一日とその周辺』(津守 真, フレーベル館, 1989)を輪読することによって共通理解を図っていった。

第2期 発達に遅れがあるU児の受容のありかたについて

平成12年1月～平成13年1月末の期間の16回。

①事例検討——10回

②KJ法検討——2回

③揺さぶり法検討——4回

第3期 理想の保育について

平成13年3月～4月末の間に3回。KJ法を使って幼児理解や保育実践の展開の見通しについて検討した。

第4期 レポート発表をする

平成13年5月～平成15年6月末の間に19回。各保育者が興味や関心のある保育の事柄について一人1題、自分の研究テーマを設け、毎回レポート発表をした。

第5期 統一テーマの園内研修

「わらべ歌であそぼうー乳児を中心としてー」をレポート発表する。平成15年7月～平成15年9月の間に3回行った(現在に至る)。

ほかに、表現実技を入れる。実技研修はカーン・オルフにおける「音と動きの遊びー素材を使っのかかわりー」で描画による対話を行った。また、合宿を利用してKJ法の習得にも努めた。

1-2 園内研修の方法とその内容

表1 研修方法とその回数

研 修 方 法		回 数
1	輪読	7回
2	U児の事例	10回
3	KJ法 (U児について2回, 理想の保育者3回)	5回
4	揺さぶり法	4回
5	レポート発表	19回
6	表現実技	2回
7	統一課題「わらべ 歌であそぼうー乳 児を中心としてー」	3回
合 計		50回

表1の研修方法とその回数から言えることは、全体的には方法と回数のばらつきである。それは、前もってこのようにスケジュールを組んでという方法で行わなかったからである。1つの課題が修了した段階で次の課題へとつながっていった。

1の輪読については、それぞれの保育観が異なっていることが明確になってきた。1冊の文献を通して学んでいくことで、自分の保育観の再構築と共通理解をすすめるという観点から、筆者が文献を選び、輪読と意見交換を中心に研修会を進めていった。取り上げたのは『保育の一日とその周辺』(津守 真, フレーベル館, 1989)であった。

輪読のテーマを「子ども理解の方法」に焦点化して討議をした。読み終わった段階で、今、保育士が悩んでいることを見つめなおすところから入っていった。このような研修が重要であると思われる。

2の事例研究については、文献を読み終わった段階で、当時、保育者が悩んでいた事柄から発達におくれのあるU児をどのように受容していったらよいか考えていった。

2歳児のU児の発達をめぐって、個人差なのか障害なのか理解できず、どのようにかわってよいのか分からなかった。当初は、U児に視点をにおいて担任保育者が観察したことを園内研修で発表した。文献研修で得た「事例」「考察」「省察」などの知識を生かせるようになった。

主に、担任保育者に事例発表をしてもらい、そこから、職員全員で話し合った。事例研究の方法は次の通りである。

- ① 最初は全体的な1日の生活の中で気づいたことを記録した。
- ② 1日のうち15分、30分と時間を決めて、その時間の間を細かく記録していく方法をとった。
- ③ U児の園生活をビデオ撮りした。
- ④ KJ法を取り入れた。
- ⑤ 揺さぶり法を取り入れた。

次に事例をみていくことで以下の点に気づいた。

- (a) 保育者が子どもの非言語的コミュニケーションに気づくことで、相互交渉が生じた。
- (b) 応答することで、子どもの願いが感じられるようになった。
- (c) 赤ちゃんであっても人格をもっている。受容とは、その人格を受け入れることであり、それが受け入れの出発点であると感じられるようになった。

また、研修を行う中で、事例研究以外に発達に遅れのある子どもを見る方法として、

「KJ法」や「揺さぶり法」を取り入れた。

3のKJ法については、個人の考え方の整理と集団の意思の統一に有効である。この手法を取り入れて問題解決の手がかりにした。KJ法を使用したのは、①U児のケース、②理想の保育の2点である。

①のU児のケース事例は、研究の目的やねらいを明確化するための方法として使用した。その結果、U児の実態や輪郭を考えあうことができた。これを手がかりにU児にかかわっていくと、エコラリーのあること、言葉はでないが言葉に関する表出が生活の場面で多々表れることに気づくことになった。それが人とのかかわっているときに良く表れていたことも確認できた。その結果、U児とのかかわりとしては、人とのかかわりを多くもたせ、かかわりの中で、言葉が理解できるようになっていくという手がかりも見つけた。

②理想の保育についてのKJ法を試みた。子どもの実態を知ることは園内研修の第一歩である。そこで、前回用いたKJ法でM保育園の実態を洗い出していた。親育て、集団のまとめ方とコツ、保育内容の検討、理想の保育、子どもとどんな遊びを楽しんでいきたいか、子どもへの接し方、しかり方、甘えさせ方、さらには保育者として、どのような子どもに育ってほしいと願って実践を行っているのか、一人ずつ発表した。

4の揺さぶり法の効果について検討した。発達に遅れがあるU児に働きかけをしても反応することが少なく、表情が乏しかった。保育者は何を手がかりにコミュニケーションをはかっていけばよいのか迷うことが多かった。言葉をあわせての適度な揺さぶりは、発達に遅れのある子どもの心身の発達に効果があるのではないかと考えられた。そこで、揺さぶりが発達に遅れのあるU児にどのような効果を及ぼすかを検討した。

手続きはU児の日常的行動を自然観察法とVTRの観察から、U児の行動特徴を抽出した。

抽出した内容から特に保育者が気になるU児の①意欲的な身体動作、②嬉しい表情の身体動作、③友達と遊んでいる時の身体動作の3点を取り上げて話し合った。

日付、言葉をあわせての揺さぶりをした回数とその部位について記録を積み上げ、蓄積した事例を、考察・省察した。U児の身体動作と保育者の言葉をあわせての揺さぶりは26日間で67事例であった(平成12年9月～10月14日まで。時間は9時の登園から17時の降園)。

言葉は話す側と受け取る側が意志や感情を交わす行為である。U児と保育者との関係ができてくると、揺さぶりを介してのコミュニケーションは同じ言葉や動作を繰り返すわらべ歌の遊びへと発展していった。わらべ歌は「一本橋こちょこちょ」のくすぐりや、言葉を唱えた「つくつく」などをした。

こうした過程を経ることでU児の発語も多くなっていった。一語文のマンマ、ワンワンも出始めた。保育者と会話もできるようになった。それに伴い、奇声を発することが減っていった。言葉をあわせた揺さぶりを通して、U児の目の前にあるものや事柄に意味が付与されていることを、保育者たちは理解するようになった。

5のレポート発表については、自分の気づいたことをレポートすることで進められた。特に、パターンの違うものを選び出して、1回ごとにその日のレポート発表を3テーマにしぼり込んでみた(絵本、子どものこと、しつけ等)。また、1つのテーマに沿って一人の子どもをみていく方法をとった。

1回の発表に3テーマくらいを選んだ。19回のうち、1つのテーマについてのレポート発表の回数は内容によって違う。テーマは次の通りである。

- ① 子どもの遊び
- ② 子どもと絵本
- ③ 子どもの心の変化

- ④ 一人ひとりの排泄状況の把握
- ⑤ イメージの世界で遊ぶ
- ⑥ トイレトレーニング
- ⑦ 保育士の対応
- ⑧ しつけ
- ⑨ H児について
- ⑩ T児の叩く行動
- ⑪ イスにすわるまで
- ⑫ 友達とのかかわりについて
- ⑬ わらべうたで遊ぼう
- ⑭ コマつきの箱から出るには
- ⑮ ハイハイができるまで
- ⑯ ささいなこだわり
- ⑰ 子どもや親とともに育つ
- ⑱ 自分の気持ちをことばで伝える

6の実技については、文献を通して、「応じあう」「共感」「受容」についてイメージを形成した。それを保育者が身体化する技法として、カール・オルフにおける「音と動きの遊び—素材を使ってのかかわり—」で描画による実技をした。そのことで、「応じあう」「共感」「受容」の楽しさを実感することができた。一人ですると思いつかないことでもみんなですると楽しいこと、気づくことがたくさんあることが分かった。

保育者の感想は以下の通りである。

- ① 応じあえるから楽しかった。
- ② こうしてみようと絵が、膨らんでいった。
- ③ 1枚目より2枚目と描き進むことができた。
- ④ 大きな紙になって楽しくなっていった。
- ⑤ 意味がなく描いていたが、描き終わると意味があることが分かった。
- ⑥ 見方によって感じ方が違う。
- ⑦ 心の内が、結果として、目に見えた。
- ⑧ 描き進むにつれて、色の使い方が決まってきた。
- ⑨ 声・身体で表現したので、感じが出やすかった。
- ⑩ 絵に言葉が加わって、他者と思いを出し

合いながらの過程が楽しかった。

- ⑪ 自分の絵に題名をつけてくれて、嬉しかった。
- ⑫ 一人で思い付かないことでも、みんなですると楽しかった。
- ⑬ ため息(声)なのに、いろんな色で作品が変わることが分かった。

7の統一課題については、「わらべ歌で遊ぼう」—乳児を中心として—、にする。その内容は、わらべ歌を①0歳、1歳、2歳と年齢別にみていく。②どのような時にわらべ歌をうたっているか。③どの部位(顔・指・手・お腹)を使って歌っているかを、実践記録からみていった。

その結果、各年齢に共通していることは、子どもが興味をもち、楽しんでいることが分かった。

① 0歳、1歳、2歳と年齢別にみていくと、0歳児は表情豊かで分かりやすく動作がはっきりしていて、言葉も簡単な繰り返しのものがよかった。保育者とのふれあいの中で、声を出す、笑う、模倣することが分かった。1歳児は一人でもじっくり歌える簡単な動きのあるわらべ歌をよくうたっていた。他児がしてもらっているのを見て、自分も同じようにまねていた。また、2歳児は友達とのつながりや広がりが出て十分に楽しめるわらべ歌へ発展していった。

② どのような時にわらべ歌をうたっているかについては、ゆったりとかかわれる室内が多いが、その一方で、園庭の芝生も長時間、歌っていたことがわかった。

③ どの部位(顔・指・手・お腹)を使って歌っているかについては、0歳児では、顔、手、腕であった。1歳児は体、手、お腹、指、2歳児では体、手、足、お腹、指であった。月齢が高くなるほど、部位の数が増えていった。そして、簡単な動作から色々な部位を使うようになっている。次に乳児におけるわらべ歌の全体的な評価としては、

- (a) 保育者も子どもも、動作や顔の表情を表現することが豊かになった。
- (b) 社会性やルールを培うことができ、人とのつながりが持てるようになった。
- (c) 保育者の話に興味を持つことができるようになった。
- (d) 乳幼児の身体の発達を促すことができた。

このように、乳児の視点から、わらべ歌について細かい観察を行うことができた。

1-3 保育者の変容過程

保育者が5期にわたってどのように変容したかを検討する。

第1期の本の輪読は、共通理解をするために始めた。日々実践の繰り返しであるが、改めて本の輪読をしていくことで、自分の保育の見直しや、意味付けができ、実践と理論のつながりを見い出すことができた。また、「事例」とは、「考察」とは、「省察」とは、といった保育を振り返り、構築していく方法を習得することができた。

第2期の発達の遅れがあるU児の受容のありかたについては、次の①～③の経過を辿った。

- ① 文献研修で得た「事例」「考察」「省察」の知識を活用しながら、記録を取り、整理することで、保育を振り返る資料を効果的に蓄積することができるようになった。
- ② U児について発表することで、他の保育者の見方や考え方を受け入れ、また、保育者自身の考え方に幅が持てるようになった。
- ③ U児について発表することで、他の保育者から協力をしてもらえるようになり、保育がやりやすくなった。

①～③について担任保育者が感じ取ること、U児とのかかわりにおいて、自信ややる気をもって意欲的にかかわれるようになった。

このことは保育者の変容につながると考えられる。

保育者の資質が向上した1つの方法として、言葉で表現できないのでパニックを起こしていたU児について、KJ法や揺さぶり法を用いることで、多角的な視点から保育を振り返ることができたことである。

また、他の保育者はU児の捉え方を担任とは違った捉え方をしていたことにも気づいた。保育者自身が枠組みにとらわれないで、多様な見方、考え方を保育者自身が自覚できるようになったのである。そのことで、U児とのかかわりを楽しめるようになった。その成果を次のように整理することができる。

- ① 他の保育者の見方に気づかされた。
- ② U児の姿が自然と見えてきた。
- ③ 保育についてゆきづまりを感じていたが、違った角度からU児を見ることができるようになった。
- ④ 職員の心が1つになった。
- ⑤ つかみどころのないU児と思っていたが、KJ法を使って図式化すると、いっぱいU児の生活があふれていた。
- ⑥ 整理されるとU児の育ちがよくわかった。

このように、みんなでU児の育ちや状況、内面をめぐる構成図を作成していくことで、職員の心が1つになり、今まで気づかなかったU児を、多様な角度から知ることができるようになった。

また、保護者に対して、園では毎日連絡帳を書いて日々のU児の変化や気づいたことを伝えていた。しかし、これまで、親からの返事は一度もなかった。保育者のU児に対する理解が深まるのと相互して、母親がU児の障害を受容できるようになり、第8回目の園内研修では、お母さんが連絡ノートを書くようになったとの報告があった。U児が卒園ということで、この事例研修は終了するが、卒園後も母親が来園してU児のことについて相談にくることも多いという。

つまり、保育者の資質が向上することと並行して、母親と信頼関係を結ぶことができたと言えよう。園内研修のもう1つの成果ではないかと思われる。

次に「揺さぶり法」では、U児にとっては適度な刺激となり、自分の気持ちを向ける対象(ここでは保育者)がはっきりしてきた。そして、保育者とU児が共感できる場が多くなり、信頼関係が豊かになった。そして、U児の言葉の発達を促すこともできたと思われる。

それに伴って、保育者との関係が豊かになると、友達との関係にも変化が生じ、お気に入りの友達と豊かにかかわれるようになったことに気づいた。

つまり、U児は最初、物(おもちゃ)とのかわりであったが、そのことを保育者が気づいて受け入れると、U児と先生の信頼関係ができた。つまり、U児は先生を好きになり、先生が好きになると、友達が好きになることにつながっていった。図式化すると以下のようになる。



第3期は保育者が保育についての情熱が高まり、これを受けて「理想の保育」について話し合いを重ねた。U児を理解する手立てとしてKJ法を体験した結果、理解しやすかったので、今回もKJ法を使って検討した。

KJ法を使い、グループでまとめたことについて意見を言い合い、図式化することで各自の興味のあることをレポート発表していくことに目標が定まった。

第4期のレポート発表は2年間続けることができた。レポート発表は、それぞれ保育者が興味や関心のあるものを出した。2年間続けることができたのは、それぞれの保育者が悩み求めている保育であることから、継続で

きたと考えられる。

10回目の時に、それぞれのレポートを限られた時間内で発表するのは時間的な限界があることに気づいた。読む時間がなかったりして、会が進まないことが多かった。そこで園内研修までにそれぞれのレジュメを読んでおいて、質問事項をメモしておき、園内研修のときに発表するようにした。そのことで園内研修の方法を吟味するようになった。

第5期は19のテーマから保育者も保育をしていて楽しいと思えるもの、そして、子どもも楽しいと思えるものが「わらべ歌」であることに気づいた。特に、研究事例が少ない乳児にとってのわらべ歌を研修課題として取り上げた。

その結果は、次の通りである。

- (a) わらべ歌を生活の一部として子どもに伝えることで、楽しく過ごせるようになった。
- (b) わらべ歌を始めた頃はレポートを意識しながら歌っていたが、だんだん自然と保育者自身がわらべ歌を歌うことが楽しくなり、それが乳児たちにも伝わって、いっそう保育が楽しい気持ちになった。

このように保育者が変容したのは、研修を重ねることで今まで気づけなかったことに気づき、また、そのことを足がかりにして、次の保育へつなげていくことができるようになり、保育の質が向上したからであると考えられる。つまり、変容していくためには、保育者自身の気づきが求められることで、保育者の資質が向上していくことが確認できたのである。

1-4 園内研修のアンケート結果

当日参加の11名の保育者に配布。回収率100%。15項目の質問を自由記述方式、無記名で行った。本研究では保育者の変容の内容を以下の5点を取り上げて分析する。

- ①「研修会を毎回することで保育者として変容できましたか」
- ②「どのようなところが変容できたとおもいますか」
- ③「園内研修会で、充実感・達成感を味わったことはありますか」
- ④「園内研修会で、充実感・達成感を味わったときはどんなときですか」
- ⑤「園内研修会をしたことが保育の場でいかされましたか」である。

①の「研修会を毎回することで保育者として変容できましたか」については、82%の保育者が大いに変容した、やや変容が18%で、「どちらともいえない」「あまりない」「まったくない」はいなかった。全員の保育者が自分なりに変容でき、保育者としての資質が向上したことを確認できた。

②の「どのようなところが変容できたとおもいますか」については、園内研修をしていくことで、子どもとのかかわりにおいて、保育者は変容したと感じたという回答が多かった。回答内容は、

- 子どもの動きを細かく見られるようになった。
- 子どもを違った角度で見るようになった。
- 園内研修会のあとは意識して子どもにかかわれるようになった。
- 他の保育者の保育を知ることができ、違った視線で子どもを見るようになった。
- 子どもの姿が見られていなかった部分を、少しでも見ようと努力するようになった。
- 子どもの姿を「なんでだろう」と問うようになった。
- 園全体の子どもに目を向けるようになった。
- 書くことによりまとめ、保育の反省になった。
- 書くようになって、子どもの姿を「なんでだろう」と考察したり、反省するようになった。
- 保育の順序を考えるようになった。

- 他の先生の考えが聞けて参考になった。
- 他の先生の考えを受け入れることができた。

③の「園内研修会で、充実感・達成感を味わったことはありますか」については、「おおいにある」が37%、「ある」45%、「どちらともいえない」18%であった。82%が充実感・達成感を味わったことになる。経験年数の多い少ないに関係はなかった。

④の「園内研修会で、充実感・達成感を味わったときはどんなときですか」の問いについては、

「おおいにある」と答えた保育者は、

- 子どもの成長が発見できた。
- 子どもと接する毎日のことが勉強で、見直すことができたとき。
- レポートをやり終えた時や、その内容を誉めてもらえたとき。
- 子どもの日々の成長・変化が見られ、自分自身もいろんなことに気づくことができたとき。

「ある」と答えた保育者は、

- みんなで1つの発表について意見を言い合ったりできたとき。
- 自分のやりたいことをレポートで発表できたとき。
- 楽しくレポートできたとき。
- 最初はわけがわからなく参加していたが、段々とレポートしてできあがってきたとき。
- 園内研修会のためのレポートをすることで子どもの姿がよりよく見えたとき。
- みんなで1つの発表について意見を言い合ったりできたとき。

「どちらともいえない」の回答はなかった。

⑤の「園内研修会でしたことは保育の場でいかされましたか」の問いについては、

- レポートでわらべ歌を取り上げることによって、自分のなかで、わらべ歌が身近になり、子どもとのふれあいをよりたくさん楽しくもてるようになった。
- レポートをすることで事例をみつけようと

意識することによって、子どもをじっくり見つめることができ、他の知らなかった子どもの様子、反応を見ることができる。

- 記録をとることで、より子どもたちの姿をみつめられるようになった。
- 子ども理解の方法とわらべ歌を学べた。
- トイレトレーニング時に保育者の誘いや言葉かけによって、変わっていく子どもの姿。
- 保育士のかかわり方がそれぞれ个性的で、その個性の豊かさが子どもの心の動きを左右することが発見できた。
- トイレトレーニングを子どもと一緒に楽しみながらすることができるようになった。
- ゆったりと、1対1でかかわり、繰り返し伝える大切さを知り、じっくりと子どもとかかわることができるようになった。
- 常に子どもの気持ちを受け止め、共感しながら保育する。
- 子どもの気持ちを理解し、共感しあうということを実感しながら保育できるように思う。
- 記録したり考察、省察することで、自分の保育や子どもの姿を改めて問い直すことができた。

今回のM保育園のアンケート調査結果では、「ためになった」とか「楽しかった」「やる気になった」という評価が多かった。このことは、保育者が保育への確かな目標を持つことができ、そのことが資質の向上につながったことがアンケート調査から窺えた。

Ⅳ 考 察

以上のことから、保育者の資質の向上をはかるためには、①実践記録をとること、②園内研修の2点が必要であることが考えられる。保育者は日々、子どもを保育しながら保育の資質の向上を目指している。しかし、その保育行為は、マナー化する傾向がある。自分ではこれでいいのだろうかという戸惑いもあるが、そのままになってしまうことが多い。

また、自分の保育実践をレポート発表して他者に問うことは大変勇気があるので、実際にはなかなかできない。

事例研究のところで保育者は「実践の事例記録を作成するためにU児のことを書いていると、自分の捉え方がまちがっているのではないかということに気づくことができた。そして、他の保育者に話すことで、子どもの問題ではなく自分の問題であることに気づいた」とあった。つまり、保育者の資質の向上は、次の一連のプロセスが必要であると言える。

記録した事例を発表→気づき→気づいたことを行動に移す(とりあえず気づいたことをやってみる)→省察(ふりかえって記録)

保育者が一歩前に出る(資質の向上)ためには、まず心に残った事例の記録をとることが必要なのである。記録をとって一人で抱え込むのではなく、その次はとった記録を園内研修の場で発表をする。

ここでの気づきとは、よいところは自分のものにしていくことである。つまり、気づいたことをどう実践にいかしていくかがキーワードになる。気づいたことを行動に移すには、いろいろな方法を使って、自分流にアレンジして実践することである。

このように、実践、そして記録、また、実践、そして記録という作業の繰り返しが、保育者の資質を向上させていくといえよう。

保育者には、手際のいい人、じっくり考えて行動する人、物静かな人、元気いっぱいの人、いろいろなタイプの保育者がいる。そうした保育者の性格を理解し、威圧的になったり、迎合的になったりしないで、それぞれの保育者が仲間の発表を傾聴することも大切なことである。そのためには、受容、共感、承認、激励のカウンセリングの技術が重要であ

るといえる。

園内研修会を4年間継続していく中で、中だるみになってしまう時もあった。緊張感や発展がなくなったり、ある一部の保育者だけの発言に流されてしまいがちの時期もあった。その時、保育者たちは考えた。その問題解決は、保育後の限られた時間を園内研修のためにどのように有効に使うかであった。レポート発表の当日までに、発表者のレポートに目を通し、質問カードに記入する方法である。そうすると、時間を有効に使うことができた。また、疑問に思ったことを端的に聞くことができた。この方法を取り入れることで、園内研修に笑いが生まれ、一人ひとりの保育者が楽しいと感じながら、園内研修を進めることができるようになった。これは園内研修のあり方を考える上でも大変貴重な発見であった。

実践記録のレポート発表、園内研修、実践のサイクルの繰り返しを通して保育者の気づきが生まれ、保育者は変容することで保育者としての資質が向上できることが分かった。

V まとめ

最近、園内研修はほとんどの園で、保育の改善や充実を目指して行われている。しかし、研究のための研究になってしまっている傾向がある。本研究では、そういうことにならないように、具体的な実践を主に取り上げて研修を重ねてきた。

まず、保育者が園内研修でテーマについて話しをすることで、今まで自分だけの保育であったのが、自らの記録や意見を公表することで、自分の保育も心も開かれていく。開かれていくことで、自分の枠組みがはずれる。「どうすればいいの」という疑問をもち、行き詰まる。そのことが、保育者の思考を重ねていくきっかけになる。

また、保育者の資質が向上するには、他者の話しにも心をかたむけ、自分の見方、考え方をくつがえす努力が求められる。これらは非常に勇気のいる作業である。その作業をのりこえるところに、「そうだったのか!」と思える保育者の確信が生まれる。その瞬間こそが大切なのであり、そうした瞬間の積み重ねが、やがて保育者の資質向上へと繋がっていくのである。

引用・参考文献

- 1) 小川圭子：発達に遅れのある子どもの身体動作と保育者の言葉をあわせての揺さぶり効果についての研究、日本保育学会第55回大会研究論文集、122-123頁(2002)
- 2) 片山忠次・名須川知子：現代生活保育論、法律文化社(2003)
- 3) 金子利子・諏訪きぬ・土方弘子：「保育の質」の探求—保育者—子どもの関係を基軸として—、ミネルヴァ書房(2000)
- 4) 高浜裕子：保育者としての成長のプロセス—幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達—、風間書房(2001)

(受理 2004年2月18日)